

『本多庸一』—信仰と生活—

氣賀健生

本多庸一の信仰生活。日本にキリスト教を定着させることに生涯をかけた人生。それが本多庸一の一生であった。同時代人の山路愛山は「何ともいえず豪かった人」と本多を評しているが、何も説明していないようで、実は最もよく本多を物語っている。偉大な常識人本多庸一は、淡泊率直、輪郭が大きく懐が深く、不思議な説得力があって、ことに当たっては融通無碍で筋だけはシッカリ通す、天声長者の風格を備えた人物であった。この本多庸一を理解する鍵は二つ。第一に人格に於いても人柄に於いても“大きい人”、第二に“明治人”。明治45年、明治の終焉と共に昇天した本多は、その発想に於いて、その行動に於いて、まさに明治時代人であった。

本多庸一は弘前で津軽藩の重臣の家に生まれ、当時の藩中のエリートとしての教育を受け、弱冠20歳にして一藩の命運を担って明治維新動乱の渦中に奔走した。

新時代の明治3年、藩命によって横浜に留学し、洋学を修めるために宣教師ブラウン及びバラについて学ぶが、バラ宣教師の、自分を迫害して追いたてようとする日本および日本人のために声涙ともにくだって祈る、その真摯な熱誠にまず打たれ、その人格に惹きつけられ、それを生み出すキリスト教の世界に足を踏み入れる。そこで神の前に置かれた人格の尊厳と平等を教えるキリスト教を理解する。さらに進んでその上に立つ近代市民社会の倫理と論理を知るに及んで、これがなければ日本の国は救えないと確信するに至る。こうしてイエスを救世主と信じるに至って明治5年5月3日、23歳にしてJ.H.バラから受洗する。

この本多の入信過程は、明治初期の士族のキリスト教徒に見られた「理念型」と称すべきもので、「私がキリスト教を信ずるに至った強い動機は我が祖国のためということであり、キリストを聞いて

真に日本を救うものはこれであることを知った」と自ら述べている。

さて明治7年、宣教師イングを伴って故郷弘前の帰り、明治19年に至る12年間、政治、宗教、教育に活躍する。まず東奥義塾の経営と教育にあたり、弘前メソジスト教会を中心としてイングと共に伝道を進める。そして政治結社「共同会」によって青森県の自由民権運動を指導し、県議会委員更に議長となり、宿敵だった津軽と南部を和解させ、名議長とうたわれた。

そして仙台メソジスト教会で一年間牧会をした際、東京英和学校即ち後の青山学院の校主として招聘され、約一年後、明治22年「教育宗教の視察を目的として」第一回の訪米の途にいくが「政治にも視線が向いていた」と自ら語っていた。間近に迫った国会開設。弘前の支持者たちも彼の出馬を期待していた。ところがこの時の議員法は聖職者に国会議員の資格を禁じたので、政治にも宗教にも豊富な意欲を持っていた本多は、その二者択一に直面し、大いに煩悶する。そんな或る日、列車禍危機一髪を危く回避し、九死に一生を得たことを転機に政界を断念するという、これは有名な本多庸一の劇的回心の場面であるが、より内面的な本人の精神的信仰的道程については無論分析の埒外であろう。

こうして政治を捨てて伝道者、教育者として帰国し、青山学院長となるが、その前年の明治22年に大日本帝国憲法が、翌23年には教育勅語が發布される。即ち天皇制絶対主義の論理的・倫理的基礎が固まってくる。このような当時の一般の意識を代表したのが井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」で、そこでは要するにキリスト教は非国家主義であり、教育勅語の精神に反するというのであった。この時本多は事の重大性をいち早く見抜き、キリスト教陣営の先頭に立って論陣を張ったのであった。

明治23年から40年に及ぶ17年間の青山学院長時代は、原則論に忠実な理想家であるよりも、大局

的な効果を読んで手を打つ現実家であった本多の存在が大きかった。明治32年8月3日、文部省はキリスト教主義学校に対して宗教教育及び宗教儀式を禁じ、違反するときは上級学校進学や徴兵猶予などの特典を剥奪し、各種学校に格下げすることを発表した。いわゆる文部省訓令第十二号事件である。これに対して本多はキリスト教学校の代表として対政府折衝を続け、約2年で訓令の実質的棚上げを勝ちとり、青山学院をはじめキリスト教主義学校を存亡の危機から救ったのであった。

日清・日露戦争に際して、本多は宗教人としては行き過ぎると思われる程の政府協力をしたが、それはキリスト教が現実の政治に対して決して無関心非協力でないことを実践によって示したものであった。殊に本多は、メソジスト教会の維持と青山学院の経営という、宗教活動のいわば政治面における責任を負っていた。それは宗教本来の次元におけるたてまえよりも、むしろ現実の政治・社会の枠内での計算を必要とする立場であった。本多はしばしば「教育政治家」と評され非難された。然し彼の一貫して歩み続けた道は、信仰と政治、教会この世の接点であり、避けてと通ることのできない条件の交渉の場であった。本多の果たした役割はこのすれすれの線を確保安定させることであり、それはとりもなおさず、本多にとってはキリスト教の日本社会への定着を意味することに他ならなかったのである。そのために本多は場合によっては手を汚した。妥協もした。いずれ誰かが負わねばならない、言うに言われぬ重荷を負ったのであった。本多庸一の感慨——「生等逆流に半生に浮べたる者幸いにして少しく国家のことに関するを得たり。榮余りありと云うべし」

国家と天皇に対する本多の忠誠心は「腹の中から帯刀して生まれたる身に御座候」という士族のナショナリズムに根ざしていた。従ってそこには、時の政府に対する協力を直ちに愛国心の発露と考える平均的明治人の意識構造が見られたとしても、また、やむを得ざるところであったというべきであろう。

さて、この後明治40年にはメソジスト三派が合流して、念願の日本合同メソジスト教会が成立し、本多はその初代監督になる。彼の畢生の大事業こそ、メソジスト監督としての晩年の5年間に凝縮されていたのであった。本多はメソジストの祖ジョン・ウェスレーにならい寝食を忘れて監督として

の伝道旅行に明け暮れた。明治43(1910)年エディンバラの世界宗教大会に於いてアジア代表として演説した本多は「その遣わされた宣教師の縦し忠実に吾人を導くも、彼等を送りたる本国が戦争の準備に汲々たるが如きは沙汰の限りなり」と喝破し、満場肅然として水をうったようになったという。本多の見識の一面であった。明治40年3月26日長崎での西部年会を指導中、病を得て同地で客死した。63歳であった。



関東学院50年の坂田祐 —院長からのプレゼント5回—

海老坪 眞

◆はじめに：坂田祐の家系

父母の家系⇒明治元年：戊辰の役で会津武士：賤が嶽七本槍の一人、平野権平長泰の子：中村富造を父とし、白虎隊中隊長日向外記の娘・ミエを母とする次男：祐は秋田県鹿角郡大湯村（現：十和田町）で1878(明治11)年2月12日に誕生。

◆中村祐⇒坂田祐の足跡・出来事抜粋

1896(明29)年6月14(18歳)⇒向学心に燃え東京に向かい、翌15日に八戸一泊。その夜三陸大津波に遭遇したが無事。

1898(明31)年8月1日(20歳)⇒陸軍教導団騎兵科入隊⇒近衛騎兵連隊配属⇒田中正造が天皇に直訴の時、近衛騎兵として馬上から見た。

1902(明35)年4月20日(24歳)⇒東京YMCAの説教会に勧誘され聴いた説教は木村清松師。即日⇒求道者・YMCA会員となる。

1903(明36)年5月3日(25歳)⇒四谷バプテスト教会で受浸：基督者となり半年後：霊南坂教会の東京伝道学校入校と内村鑑三著「伝道の精神」を購買読書。

1904(明37)年6月8日(26歳)⇒日露戦争では奉天大合戦従軍。翌年凱旋⇒金鵄勲章功7級授与。1906年4月27日(28歳)⇒栃木県足尾町の坂田チエと結婚。

1909(明42)年9月(31歳)⇒第一高等学校入学⇒1911年10月1日に内村鑑三門下生(白雨会に所属)⇒1912年7月、第一高等学校卒業⇒同年9月に東京帝国大学入学34歳：1915年7月9日、同校卒業(37歳)⇒母校の東京学院で働く。

1919(大8)年1月27日(41歳)⇒中学関東学院設

立し初代院長就任。校訓「人になれ 奉仕せよ」設定。【1962年14回高校卒業アルバム1頁には「人になれ 奉仕せよ」の次に「その土台はイエス・キリスト也」と明記されてある。前年11月7日には院長が瀬戸内海での福音丸乗船・下船直後、某旅館で同様の趣旨を述べているのは「恩寵の生涯」209頁にある】。

1932(昭7)年(54歳)～1946(昭21)年(68歳)⇒捜真女学校々長兼務。

1937(昭12)年4月21日(59歳)⇒神奈川県庁で御真影拝受。「御真影奉検日誌」記述開始。警戒警報・空襲警報があれば深夜でも自宅(南区庚台)から駆けつけねばならなかった。【1945年1月26日<奉護ノ御安全ヲ計リ県当局ノ指示ニヨリ県立第一、第三中学校ト共ニ港北区田奈国民学校泰安殿ニ奉還午前九時学院ヨリ自動車ニテ出発>とある。】

1941(昭16)年12月8日(63歳)⇒大東亜戦争勃発、1945年5月29日⇒横浜大空襲で木造校舎及び霞ヶ丘教会全焼。院長顔面火傷。同年8月15日⇒大東亜戦争無条件降伏・敗戦証書を生徒一同が天皇の放送を聞き終った時、<配属将校が声を荒げて「日本は負けたのではない」と徹底抗戦を叫んだが、院長が毅然とした態度で否定し、皆に動揺しない様言った>と(2005年12月8日刊「横浜大空襲と関東学院」88頁)。

1945(昭20)年10月7日(67歳)⇒院長宅で霞ヶ丘教会主日礼拝再興。【私は10月18日に平壤から復員、28日の主日礼拝から出席しはじめた】。

1949(昭24)年4月(71歳)⇒関東学院大学発足。

1959年4月⇒神学部設置。

1965(昭40)年4月(87歳)⇒関東学院院長退任。勲三等青色桐葉中綬章受領。

1966(昭41)年5月17日(88歳)⇒坂田祐著「恩寵の生涯」待晨堂より出版。

1969(昭44)年11月1日(91歳)⇒関東学院創立50周年記念式に出席。

1969(昭44)年12月16日老衰により早朝召天(91歳)。従四位叙任。同月27日にグレースセット記念講堂で学院葬。三ツ沢墓地の坂田家の墓地に埋葬。毎年召天日には墓前礼拝継続中。

◆私と院長との間での得難い体験、プレゼント：

1945年8月15日に大東亜戦争敗戦：私は同年10月18日朝鮮平壤から復員帰国、1週間後に関東学院と霞ヶ丘教会の焼跡に立つ。茫然自失帰途久保

山の坂で院長から「海老坪君だね」「ハイ・7日程前に復員して、今学院と教会の焼跡を見てえ帰るところです」「教会は10月からワシの家で始めたから来なさい」が契機で教会生活再開。以下に5回も受けた恩恵・出来事を述べる。

I) 1947(昭22)年8月29日：友人山本融兄と単立伝道所開設に当って会衆用の椅子の件で院長宅を夜二人で尋ね「六浦校地に青空放置の長椅子を伝道所の為に戴けないでしょうか」と単刀直入にお願いした所、即刻承諾された。翌日二人は大八車で磯子区丸山町7番地迄運び、9月12日(金)19時から伝道集会を開始した。2年継続。

II) 1947年末には伝道者へ召命も定まりつつあった時、院長から内村鑑三著「伝道の精神」を戴いた。「伝道者になるなら5回読め！ ならなければ返せよ！」と。本の表紙には<1903(明治36)年5月 T. Nakamura (㊦中村祐)>と署名あり、中表紙には<1947(昭22)年 祝クリスマス プレゼント 海老坪眞君>と。院長が1903年5月3日に基督教徒になった頃、ご自身が伝道者になる決意した心境を1903年5月23日の日記に<余は伝道師となり終生福音の為に働かんと決心せり>とあり、同年10月6日<東京伝道学校(㊦霊南坂教会)に入学し開校式に参列す。伝道学校に入学するに決心したるは、余が自活自給をなし得るを以てなり。爾来毎日午前中は士官学校に教鞭を取り、午後は伝道学校に通学せり>と「恩寵の生涯」14・15頁にある。その貴重な本をプレゼントされた。今は坂田記念館に展示されている。

III) 1950(昭25)年4月：日本基督教神学専門学校2年生になった頃、学費稼ぎに友人白浜三次郎兄の斡旋でソロバン塾の開設準備中の時期に親友佐々木晃兄を通じて院長に知られ、「学院から奨学金を卒業迄上げるからソロバン塾はするな」と。

IV) 1953(昭28)年伝道者になって京都バプテスト教会伝道師3年の1956年1月：勇躍単立開拓伝道に使命感を感じていた頃、学院で宗教主任としての招きを受けて横浜で開拓伝道をする事とした際に院長から「借家を探したら家賃は学院奉仕資金から援助する」と有難いお言葉で開拓伝道開始したのは1956年11月25日、以後土地取得・仮会堂兼牧師館献堂した1965年9月迄援助を受

けた。

V) 1960年4月24日：按手礼会議でパスした際の祝会で丁重なご祝辞を戴いだし「内村鑑三著の聖書注解全書17巻をプレゼントする」と。但しこれは5回読めとは言われなかった。

◆最後に余談二つ……

1) 私の縁戚の北見徳五郎老人が「院長は昔「中村祐」と言わなかったか」と問われたので「その通り」と答えたら、北見老人は「日露戦争当時中村祐の部下だった」と。そこで私は院長に「北見徳五郎と言う人を覚えていますか」と申し上げたら、暫く考えて「北見は日露戦争の際のワシの部下だった」と。そして「その北見を何故知っているのか」と問われたので私の縁戚ですと答えた所、「是非逢いたい」との希望に…「私の父も日露戦争で騎兵隊員として従軍しましたので私の家に来て下さい」と申し出で…暫くして三者会談（快談？）が実現し楽しく語り合っていた最後に歌ったのが“道は六百八十里…”と言う日露戦争当初の軍歌であって、三人は意気投合して大きな声で歌っていた。

2) それから数年後、坂田創兄が買い求めたテープレコーダー：ソニー360に院長が録音したのも“道は六百八十里”であり、後日坂田創兄から聞かせて頂いたが、それを今は聞くことは出来ないのは残念至極。

因みに“道は六百八十里”の1節は“道は六百八十里 長門の浦を船出して はやふたとせの故郷の山を遙かに眺むれば 曇り勝ちなる旅の空 晴らさにならぬ日の本の御国の為と思えば露より脆き人の身は ここが命の捨て処”2節以下略。

A. H. キダーと C. A. カンヴァース —伝道と女子教育に捧げた生涯—

小 玉 敏 子

今から100年以上前に来日し、東京と横浜でそれぞれキリスト教伝道と日本の女子教育に生涯を捧げ、日本の土となった二人の宣教師について考察したい。

アンナ・キダー (Anna H. Kidder 1840.8.25 – 1913.11.23)

アンナ・H・キダーはニューハンプシャー州アマー

ストで生まれ、13歳のときに両親と共にヴァーモント州ピーチャムに移転、同州のカレドニア・アカデミーで教育を受けた。2000年8月、人口665人のピーチャムを訪れた筆者は、この村の歴史に詳しい男性にキダーが属していた会衆派の教会とその墓地に案内された。キダー家の人々のイニシャルを刻んだ5個の墓石の前に立つ墓碑の正面に

ANNA H.
DAUGHTER OF BENJAMIN
AND ELIZA KIDDER
1840-1913
MISSIONARY TO JAPAN FROM 1875
TO HER DEATH IN TOKYO

と刻まれていた。東京の染井霊園に有志によって建てられた墓があるアンナ・キダーの墓碑に出会うことを予期していなかった筆者は、感無量であった。交通機関が発達しておらず、不自由な生活を強いられる異郷の地での伝道に生涯を捧げた彼女を、故郷の人々が誇りに思っていたことを実感した。郷土史家は筆者がはるばる日本から訪れたことを知り、アンナ・キダーの働きが無駄ではなかった、と感慨深そうに言った。

後日その男性から送られてきたメモに、キダーはピーチャムの会衆派教会に1855年に加わり、1872年4月にロードアイランド州プロヴィデンスのバプテスト教会に転会、とある。また、カレドニア・アカデミーでは、キダーは1855年、58年、59年、60年、61年、63年の秋学期に在籍したと記録されている、という。

この中等学校カレドニア・カウンティ・グラマー・スクールは、1797年12月1日、ピーチャムに開設された。1897年、8月11日と12日の2日にわたって創立百周年記念行事が行われ、式典でキダーの手紙が披露された。40年前にこの学校で受けた教育に感謝し、母校に対する愛と誇りを表明、同窓生が1年に1ドルずつでも寄付して母校発展のための基金を作る事を提案している。また、記念行事の費用に2ドル、基金設立の手始めに2ドル送っている。しかし、この長い伝統を誇るピーチャム・アカデミーは、1960年代後半の教育界の変化や統合の波に押されて、1971年、廃校に追い込まれる。

カレドニア・アカデミー卒業後、キダーはまずヴァーモント州で初めて公立学校の教壇に立ち、ヴァージニア州、北カロライナ州、フロリダ州な

どで黒人を教えた。その後さらに、ロードアイランド州プロヴィデンスの黒人孤児院で数年間教える。このプロヴィデンスでユニオン・バプテスト教会に転会し、婦人バプテスト外国宣教師協会によって、クララ・サンズと共に、最初の独身女性宣教師として日本に派遣される。

1875年11月2日、アンナ・キダーとクララ・サンズは横浜に上陸した。サンズは、ネーサン・ブラウンを助けるために横浜に留まり、神奈川県下で伝道活動に従事したが、キダーは、1873年10月来日、翌年から東京で活動していたジェームズ・アーサーを助けるために東京に行き、アーサーが始めた女子の学校を引き継ぐ。この学校は、外国人居留地の外、駿河台鈴木町22番地（森有礼の所有地）に開設されたので、当時の日本の法律に従って、東京府に提出された書類では校主は日本人で、キダーは1英学教師にすぎなかった。しかし、『萬朝報』の死亡記事（大正2年11月25日）には「三十八年間、我国に在りて基督教の宣伝と女子教育の爲めに尽瘁せし、駿河台英和女学校校主エー、エッチ、キッター女史」と書かれ、同日の死亡広告に「本校前校長ミス、エッチ、キッダ」とあり、宣教師会議の報告書には“Miss Kidder, Principal”と記載されている。

35歳で来日したキダーは、73歳で永眠するまで、女子教育と伝道と社会福祉にすべてを捧げた。この38年間に病氣療養のため1度帰国したほかは、他の宣教師たちが避暑に出かける時にも東京に留まり、彼女の家であり職場である駿河台の学校を離れなかった。

キダーの後に校長となったホイットマンは1917年に死去、次のカーペンター校長の時代、1921年3月に駿台英和女学校は惜しくも閉鎖された。

クララ・カンヴァース (Clara A. Converse, 1857.4.18 - 1935.1.24)

クララ・カンヴァースはヴァーモント州南部のグラフトンで農業を営む父ニュートンと母メアリーの8番目の子供として生まれた。父ニュートンは物堅い清廉な人、母メアリーは慈しみ深い信仰の人で、「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」と教えた。とくに「神を敬い、人を愛して世のために尽し、人の心の友となる」という母から受けた精神はクララの一生を貫いた。

小学校卒業後、ヴァーモント州師範学校に進学、1873年6月に卒業し、16歳でグラフトンの小学校

教師になった。しかし、さらに教養を高める必要を感じ、1876年、ヴァーモント・バプテスト協会によってサクストンズ・リヴァーに創設された中等教育機関ヴァーモント・アカデミーに入学する。対象となるのは9年生から12年生、現在の日本の中学3年から高等学校3年までの4年間である。この学校は幾多の困難を乗り越えて、現在も私立の進学校として4年制の教育を行なっている。創立と同時に入学した生徒の中には、クララ・カンヴァースのように、3年で卒業した者がいる。

1879年にヴァーモント・アカデミーを卒業したカンヴァースはスミス・カレッジに進学し、83年に卒業、ヴァーモント州視学を1年つとめた後、ヴァーモント・アカデミーの教師となる。単に学識や能力が優れていたばかりでなく、その信念に満ちた、魂をゆさぶらずにはおかない人柄が、学生たちに及ぼす感化は顕著で、校長や学監の信頼も厚く、前途に期待をかけられていた。カンヴァースも母校を愛し、熱意をもって誠実につとめていた。

ところが、しばらくすると、カンヴァースは自分には何か他になすべきことがあるのではないかと感じるようになった。何度も祈り、ついに心に決めたことは、宣教師になることであった。熟慮の末、1889年5月、カンヴァースは、ヴァーモント・アカデミーに辞表を出し、婦人バプテスト外国宣教師協会に宣教師志願を伝えた。それは、ネーサン・ブラウンの夫人が教育宣教師派遣の要請をした直後であった。

1890年1月、横浜に向かう船で、カンヴァースは、病氣療養を終えて帰任するキダーと同室になり、日本における宣教活動、女子教育についてさまざまなことを学ぶ。「ミス・キダーのようなしっかりした思慮深い人物に親しみ得たことは宣教師として自分に与えられた数々の恩恵のしかも最初の一つである」とカンヴァースは述べている。

横浜では「英和女学校」を創設したブラウン夫人が出迎え、山手居留地67番のブラウン夫人宅に案内する、裏手にある印刷所の2階が少女たちの教室兼寄宿舎であった。ブラウン夫人の助手をつとめるエイミー・コーンズ（山田千代）から日本語の手ほどきや、日本の風俗、習慣、横浜の町のことを学び、カンヴァースはさっそく聖書を教え始める。ところが、同年9月、ミセス・ブラウンはウィリアム・アシュモアと結婚して中国伝道に旅立ったので、カンヴァースは33歳で英和女学校

校長となる。

1891年12月、山手34番に校舎が落成し、移転、校名を“Mary L. Colby Home”に変更した。また、“Truth Seeking”を日本語に訳し、「捜真女学校」という校名を公表した。

捜真女学校は山手34番で順調に発展したが、さらなる発展のためにより広い校地が必要とされ、また校地の真下にトンネルができるため、1910年に現在の神奈川区中丸に移転した。関東大震災の折に所要のため町に行ったカンヴァースは翌日無事に学校に戻り、校舎が無事なのを見て安心した。

かねてから退職を申し出ていたカンヴァースは、1925年7月、ようやく後継者アナベル・ポーレーを得て、35年間の校長職に終止符を打った。その後は名誉校長として学外から捜真を見守り、1935年1月24日、山田千代と卒業生たちに見守られて召天した。三ツ沢墓地の墓からは今でも捜真の校舎がよく見える。



「讚美歌のルーツからスピリチュアルへ」 — 英米の讚美歌における口承伝承の流れ —

竹内 智子

始めに：今回は、ヨーロッパ文化の基層ケルトに遡るバラッドを背景に、ケルト・キリスト教からイギリスの宗教改革を経てアメリカのスピリチュアルの誕生までを通史的に辿る。

また、ケルト・キリスト教との関連でキリスト教音楽のルーツにも触れたいと思う。

I ケルト・キリスト教と初期キリスト教音楽

ケルトとは、かつてヨーロッパのほぼ全土に分布し、2500年以上の歴史を持つケルト語の文化圏を指す。詩を重要視したケルトは、職業詩人バルドを養成し、あえて文字を使わず口承にこだわった。古来から諸宗教がそうであるように、「声」に出すことに特別な意味があったのだ。ケルトの宗教は自然崇拜で、靈魂不滅や輪廻転生を信じた。中でもケルトの伝統が色濃く残るアイルランドにおけるキリスト教の布教は、5世紀に聖パトリックにより土着の文化を尊重しながらなされ、分散的、禁欲的な東方修道制を基盤にした修道院文化が開花する。ケルトの世界観を表現した独特な装飾写本が生まれ、文学が口承の語り口を生かす形で文字化された。そして学問に優れた僧達はヨー

ロッパ大陸に渡り、200以上の修道院を創設する。アイルランドがキリスト教を自らの文化に主体的に融合させた点は異文化受容の観点から注目値する。初期キリスト教は、地中海交易と共にローマの公認以前にガリアのケルト社会に入っていたと推測される。例えば写本の装飾は、コプト教、イスラム教や北方ヴァイキングの影響も受けているように、文化の重層性を示している。

音楽は、口承伝承の為楽譜が存在せず、9世紀のローマのグレゴリオ聖歌の強制によりガリア聖歌が衰退してしまい、正確に把握することは困難である。しかし初期グレゴリオ聖歌のネウマ譜の中や、今日まで歌い継がれてきた歌唱の中に痕跡を認めることが出来る。(譜例：ネウマ譜、鑑賞：ゲール語聖歌「金曜日の悲歌」)キリスト教音楽のルーツは、古代エルサレム神殿における詩編唱に遡る。ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教の伝統的聖歌にも共通の特徴は、西洋に調、拍子、和声が現れる以前の単旋律で、口承伝承であることだ。また音と音の間のプロセスが大切にされ、旋律は絶えず「あるもの」に向かって動くが解決点はなく、朗唱との関連で旋律より言葉の抑揚が反映される。(鑑賞：神殿の詩編唱、ユダヤ教の旧約朗唱、コプト教聖歌、シリア正教聖歌、ビザンツ聖歌、イスラム教クルアーン朗唱、ヒンドゥー教サーマ・ヴェーダ)これらは本質的に「霊的」な音楽で、霊が鼻から入り鼻腔で共鳴して響きが増すと倍音を作り、一種のトランス状態を起こす。その時霊は声となって身体から離れ、再び霊的世界に帰って行く。霊とは実際は息のことである。身体力を抜いて息を通し共鳴が起こると、身体は楽器になる。このプロセスは発声の原理であると共に、砂漠の隠修士の修行に共通する身体的、宗教的体験でもある。このような音楽を、オランダのR.スチュワート博士は「モード的音楽」と定義し、初期キリスト教と共にヨーロッパに入り、ガリア聖歌、スペインのモザラベ聖歌、ミラノのアンプロジア聖歌等に継承されたことを実証、更に15世紀のフランドルの多声聖歌にも可能性を探って演奏を重ねている。(鑑賞：オケゲム「ミサミミ」)

II イギリス：バラッドの伝統とピューリタンの出現

・古期～中期英語期 (AD1100頃～1500頃)：ケルトの口承文学はイギリスに継承され、吟遊詩人ミンストレルは「アーサー王物語」のような英雄叙事詩を朗唱し広めた。(鑑賞：「アーサーの名のもとに」) また11世紀ノルマンの征服後フランス語が公用語とな

る一方、庶民の言葉である英語のバラッドが発展する。口承の民衆詩バラッドは、キャロルのように時に踊りを伴い歌われた。(鑑賞：「Edi beo thu」)バラッドの基本は4行詩で、1行毎交互につく4・3の強勢が快活なリズムを作り物語りを効果的に伝える。(バラッド律：「バーバラ・アレン」鑑賞：「ライ麦畑を通り抜け」)庶民に馴染みのこのリズムは歌い易く、後に讚美歌に継承された。作者不詳の長い詩は変種を生み、また元来個人の感情は表現せずに聞き手の想像力をかき立てる。客観性によって人間共通のテーマが浮かび、それへの共感が次ぎに伝える力を生み出す。口承において「声」は力の源だ。声には息や音色、高低があり、それらが言葉に生命を吹き込み、真意を伝えて聞き手の心を動かす。名もない個人の声を重ねるうち、それはやがて個人の感情を越えて多くの人に共感を与える普遍的な声に純化する。バラッドのこのような特質は庶民の意識を高め、時代への批判精神を生んだ。チョーサーは「カンタベリー物語」の中で庶民に生き生きと世相を語らせ、ウィクリフは禁を犯して聖書の英訳に挑み、教会の富を批判して市民運動に影響を与えた。ルネサンス前夜である。

・近代英語期・英国ルネサンス期(AD1500～)：ヘンリー8世に始まる宗教改革により、イギリスは国教会を樹立する。典礼はラテン語から英語に変わり、英訳聖書も完成する。一方主教制を残すなどカソリックと折衷的な面もあり、音楽もカソリック時代との断絶がなく、穏和で典雅である。(鑑賞：タリス「If Ye Love Me」)印刷術は、英語の綴りの固定化と標準語の発展を促し、詩は日常会話に近いブランク・ヴァースで書かれるようになる。言葉を媒介にルネサンスが開花した。印刷された「ブロードサイド・バラッド」は瓦版のような役目を果たし、ペドラーが当時流行のバラッドの節にのせて歌いながら売った。バラッドは「聴く」から「読む」文学に移行し始める。(鑑賞：ダウラント「ご婦人方の素敵な小物」)ロンドンでは、エリザベス女王の保護を受けて演劇が興隆する。シェイクスピアは、庶民に馴染みのバラッドを劇に巧みに取り入れ、観客との一体感を計った。音楽は、中世以来この世に調和をもたらすと考えられ、演劇は、人間を観察してその多様性を肯定した。そこには混沌から調和へ向かうルネサンスの方向性がある。しかし、それはあくまで虚構に過ぎないと批判したのがピューリタンだ。彼らはカソリックのメアリー

女王期にジュネーヴに亡命し、カルヴァンの影響を受けてエリザベス女王期に帰国するが、国教会の腐敗を批判し、中でも徹底した改革を迫った分離派は厳しい迫害を受けてオランダに亡命する。多くの難民を受け入れていた大学町ライデンに12年間済んだ後、貧困やアイデンティティの問題から再び新天地を求め、アメリカに旅立った。

Ⅲ アメリカ：詩編歌～スピリチュアルへ

・ピューリタンのアメリカ移住：後にピルグリム・ファーザーズと呼ばれるピューリタンは、1620年北米プリマスに上陸する。彼らはオランダから政教分離の思想を取り入れ、信者以外も公民と認めるなど民主的な社会を目指し、インディアンに助けられながら二代目総督ブラッドフォードの時に植民地を安定させた。音楽は、カルヴァンが唯一礼拝音楽と認めた「詩編歌」である。アメリカに持ち込んだ「エインスワース詩編書」(1612)は、カルヴァンの仏語詩編を英訳した「スタンホールドとホプキンス」(1562)を元にアムステルダムで出版した完全訳で、蘭・仏の詩編歌や世俗曲も含む39の旋律が付く。(譜例：オリジナル「詩編7」)単旋律、菱形音符、小節線・伴奏無しで、彼らは律動的に軽く歌い、厳しい植民地生活の中で喜びの糧としたと言われる。リズムは馴染みのバラッド律が基本で、家庭でも聖書を声に出して朗唱し、盛んに詩編を歌った。

1630年、後続のピューリタンがボストン中心に大規模移住を開始し、神政政治による社会を確立してアメリカの中枢を築く。1636年には、優秀な牧師養成の為ハーヴァード大学を設立し、人文主義の学問と共に口語文学の伝統を生かした文章表現や演説法を教えた。音楽は、その頃には世俗音楽も愛好され、教会の詩編歌も2・3声に変化し、北米初の出版物「ベイ詩編書」(1640)が出版された。また楽譜の読めない移民が増えた為、先唱の様式が取り入れられ、エリザベス朝以来の習慣であるファソラミ唱法で歌った。先唱のリーダーに習い繰り返し歌ううち装飾が付き、旋律が変化し始め、素朴な詩編歌はやがて各移民の民謡と混合してより多彩な民謡的讚美歌に変容する。(鑑賞：先唱例「詩編19」)

・ピューリタン社会と音楽の変容：ニューイングランドで発展したピューリタン社会は、次第に不寛容さを増し、次世代の教会離れの問題を抱えたことに加え、経済の発展に伴う世の中の変化の中

で行き詰まりを見せる。また18世紀にはヨーロッパから啓蒙思想などの新思潮が入り、アメリカにもユニテリアン派やエマソンの自然主義哲学が興隆し影響力を強めた。それは教会の伝統や物質主義から離れ、個人と自然を土台とする思想で、後にエコロジーや民主主義に関連するアメリカ独自の思想として建国の精神にも継承された。

一方讃美歌の世俗化を危惧した聖職者達は、教会音楽の統一を目指して楽典書や歌唱学校を作るが、皮肉にも後者はW. ビリングスのような個人的な作曲家による新しい音楽の発信地となる。また都会ではヨーロッパ音楽が発展し、地方では多くの民謡的讃美歌が生まれ、南部で多数発刊された歌集は信仰復興運動に活用された。(譜例:「アメージング・グレイス」) 特にアイルランド系移民が多いアパラチア地方は民謡の宝庫で、多くの民謡的讃美歌を生んだ。(鑑賞:「バーバラ・アレン」讃美歌への変容: 英国~テネシー~ジョージア「天国の鳩」)

・信仰復興運動(18~19世紀)とスピリチュアルの誕生: ピューリタンの伝統が崩れると、直接的宗教体験を求める気運が高まり、各地で信仰復興運動が起こる。中でもJ. ウェスレイのメソジスト運動は音楽を重視した。国教会司祭としてアメリカ伝道に向かう船中で出会ったモラヴィア兄弟団に感化されて回心し、英国で野外伝道を開始する。口承文学の伝統から、英国では特に非国教会系の牧師が演劇的語り口の説教で民衆の心を捉えていたが、ウェスレイはケルト文化の色濃いウェールズにも頻繁に出かけて熱弁をふるった。個人の内面や霊的体験を重視し、弟のチャールズやI. ワッツによる自由訳の新しい讃美歌を用いて多くの人を導いた。特にワッツの曲はバラッド律の生き生きとしたリズムが特徴だ。(譜例:「もろ人こそぞりて」) ウェスレイのアメリカ伝道はホワイトフィールドが引き継ぎ、大都市から教区を越えて西部まで及んだ。独立戦争後、西部の荒野で行われたキャンプ・ミーティングでは、宗派を越えて貧困層が集まり、共同生活をしながら熱狂的終末預言の説教を聞き、盛んに自由訳や民謡的讃美歌を歌った。その熱気の中で生まれた音楽が白人霊歌だ。バラッド律の讃美歌からアメリカ独自の音楽・スピリチュアルが生まれたのだ。それは後に加わった黒人達も共に歌ううち、次第に黒人の感性に引き寄せられて変化した。黒人霊歌の誕生である。(譜例: 黒人霊歌への変容「ヘブライの子供達」) 黒人の口承伝承の

歴史は、西アフリカ周辺で活躍した吟遊詩人・グリオに遡る。(譜例:「クンバイヤ」)

奴隷の過酷な境遇から生まれた黒人霊歌は、信仰に重ねて現実の解放への強い望みを表現している。(譜例:「馬車よ揺れよ」) 彼らにとって歌うことは、神と出会い解放を感じることの出来る宗教体験であり、シンクペーションのリズムの中に生の原動力を秘めていた。それは連帯意識を育み、後の公民権運動を成功に導くような力をもっていた。私達は黒人霊歌から、人間の「尊厳」を聴くことが出来る。(鑑賞:「深い河」)

移民の国アメリカの音楽の源泉は、讃美歌と各国の民謡と黒人霊歌である。多くは口承伝承で、5音音階、繰り返し、即興生、体験的歌唱など共通の音楽性を持ち、その流れはやがてジャズを生み、ジャンルを超えたアメリカ独自の音楽を形成する。宗教も、宗派を越えた共通の神意識で統合しようとする公共宗教の傾向が見られる。多様性と統合のバランスが今後の課題だが、異文化の融合を果たしている音楽から学ぶ点は多いだろう。

終わりに: 通史的、客観的視野により、文化の重層性を理解することが出来る。今回取りあげた口承伝承における歌唱とは、身体的、宗教的体験であり、結果的に個人を離れる客観性を秘めている。声が霊であるとすれば、霊的なものは限りなく客観性の中にあると言えるかもしれない。

ヘボン博士に導かれた二人の男 — 中川嘉兵衛と中川愛咲 —

松岡正治

明治学院大学教授の中島耕二先生と目黒の新栄教会の記念式でお会いしたのは、平成25年の秋のことである。新栄教会の一信徒でありながら、ヘボン博士より直接の薫陶を受けた私の先祖の中川嘉兵衛の話をする、中島先生が、「それではこの研究会で話をしてみたら」と言って下さり今日を迎えることができた。

中川嘉兵衛から数えると私は5代目になる。私の祖母(加藤美亜)が新栄教会のオルガニストの一人として、長く奉仕しており、折に触れて嘉兵衛のことを話してくれていたのも、心に残る存在であった。母の従兄弟にあたる香取国臣さんが、自らも長らく製氷業界に携わっておられたが、中

川嘉兵衛の事をコツコツと調べられ、「中川嘉兵衛伝」を纏められた。出版にあたっては、明治学院の秋山繁雄先生や大島貞夫先生の協力が大きかった。大島先生は明治学院の学生部長もされていたが、愛咲の孫の、中川嘉雄氏とは竹馬の友であり、愛咲の妻の光（ミツ）を知る貴重な生き証人であった。

中川嘉兵衛は1817年（文化14年）三河国伊賀村に誕生している。16歳の時、京都に出て、儒学者「巖垣東園」の塾に入り塾頭になった。この間学んだ漢学の素養が後年、諸官庁に提出する諸届や申請書の作成に役立ったと思われる。

1854年（嘉永7年）の開国を契機に世の中の動きも日毎にあわただしさを増し、先見の明がある人は陸続と開港地、横浜に集まってきた。嘉兵衛もその中の一人だった。嘉兵衛は横浜に出て、医師のシモンズに認められ、乳牛を飼い、牛乳の販売も行った。其の後イギリス公使館のクック見習いとなり、イギリス兵からパンの製造方法を習い、当時は珍しい「万国新聞」に「パン、ビスケット販売、横浜元町一丁目、中川嘉兵衛」という広告を出し、我が国の広告第一号とも言われた。嘉兵衛が江戸に来て、イギリス公使館（オルコック）の料理人として雇われ、公使の信頼を得、横浜のイギリス兵団の食料賄方を請け負った事も大きな転機であった。

嘉兵衛はヘボン博士の来日の安政6年には42歳であったから、ヘボンの来日前には既に横浜に来ていたものと思われる。ヘボン博士との出会いは、嘉兵衛が眼病を患い、診療、治療を受け辞めしようとした時、ヘボン曰く、「あなたの病気は治った。しかしまだ恐ろしい病気が潜んでいる。しかしこの本を読めば治る」と言って渡されたのが漢訳の聖書であった。嘉兵衛は其の後、求道者となり1874年（明治7年）7月、写真家の下岡蓮丈等と共にバラ師より、洗礼を横浜の海岸教会で授かっている。夫人の隆子は一年後の1875年、タムソン師より洗礼を受け熱心な信徒となっている。

嘉兵衛がヘボン博士より学んだ事は沢山あった。

1. 医療にはこれから氷が沢山必要となり、食料の保存には氷は欠かせない。
2. 牛肉はこれからの日本人にとって大切な食料となること。
3. 世界には未だ日本で行われていない事業があること。石油の発掘もその一つである事。

4. イエスキリストを信じ、自分と同じように他人を愛する事。

嘉兵衛はクリスチャンとなり、イギリス公使にも信用され、横浜の英国駐留軍の食料納入業者に指定された。英国は生麦事件の後、居留民保護のため1863年（文久3年）横浜山手に、陸軍、海軍800名を駐留させていた。赤いラシヤの服を着ているので、日本人は赤隊とか赤トンボとか呼んでいた。駐屯地は20連隊が主であったので、トゥエンティを訛ってトワンテ山と呼んでいた。

ミルク、パン、肉など、当時の日本の食生活ではあまり縁のないものが多かった。ヘボン博士より肉の保存には氷が良いと教えられ、医療にもこれから氷が必要になると教えられ、彼は氷の販売に本格的に取り組む決心をしたのである。当時氷は大変な貴重品であり、アメリカのボストンから天然氷が運ばれ販売されていた。嘉兵衛は国内各所（富士山麓、日光、岩手、青森）で採氷を試みるが、いずれも失敗した。嘉兵衛はそれにひるむことなく採氷の適地を探していた。

運命は不思議な糸で繋がっているものである。嘉兵衛に北海道の五稜郭が採氷の適地であると教えてくれたのは、イギリス人の探検家であり、動物分布の境界線が日本では津軽海峡にあるとした、ブラキストン線命名者であるブラキストンであった。ブラキストンは、北海道の鳥類の読み方をヘボン博士に教わった事も分かっており、ヘボンーブラキストンー嘉兵衛の繋がりが、日本の氷業の発展に大きく貢献していることが分かる。

嘉兵衛はブラキストンの指導の下、五稜郭の濠を清掃し亀田川より清流を引き入れ、天然氷の採氷に成功したのである。これが我国製氷の始まりであり、「函館氷」、「竜紋氷」などの名前で販売され、嘉兵衛の製氷業は軌道に乗ったのである。開拓使の許可を得て、1873年（明治6年）には、採氷は年間1200吨に達し、東京、横浜に氷を運び、東京の越前掘には仮氷室も設置した。

嘉兵衛は其の後、北海道開拓使の殖産事業に関与し、肝油や魚の缶詰の一手販売を行った。北海道開拓使庁で醸造したビールを氷室で貯蔵し、日本で初めて上野公園でのビール販売を行い、東京人を驚かせたという記録も残っている。1872年（明治5年）、函館氷は宮内庁御用達を受けている。ボストン氷は1873年に撤退した。

ヘボン博士の辞書編纂に携わった岸田吟香と嘉

兵衛は親しい間柄だったと思われる。吟香の文章にも、「元町に住む中川嘉兵衛氏とは親しき間柄にて云々」という記述もある。日本石油の社史にも記されているが、新潟地区の石油採掘調査を、当時の民部省に中川と岸田吟香の連名で提出、それは漢学の素養を感じさせる文体だったという。新潟で採油した油はアメリカに検査に送られ良質のものだと判明しているが、この調査もヘボンの斡旋で行われた。

嘉兵衛は牛肉の販売には苦勞したが、助けてくれる人も居た。どうしても牛の屠場が東京に必要となり、旧知の港区白金の堀越藤吉に頼み、今の明治学院のそばに屠場を作る事が出来た。1872年には明治天皇が牛肉を試食され、同年10月には「僧侶も率先して牛肉を食するよう」という勅命が出て、肉食文化は大衆のものとなっていったのである。

嘉兵衛は幕末より明治中期まで、開花商人の先駆者の一人として活躍した。彼は自分の事業の成功はヘボン博士のお陰であると、終生その恩を忘れず、機械製氷の会社を長男佐兵衛が設立する年、80歳の生涯を終えた。

中川愛咲は1867年（慶応3年）9月6日、嘉兵衛の二男として函館に生まれた。1878年、11歳の時タムソン師より受洗、1881年、築地大学校に入学、1885年、東京一致英和学校を卒業、1886年、ヘボン博士夫人の一時帰国に随行し、欧米の大学に留学するスタートを切った。ヘボン博士は愛咲を神学の道に進ませたかったが、愛咲は神学には進まず医学の道に進んだ。愛咲の留学は、ヘボン博士の指導と紹介の力が大きく、短期間に多くの有名大学に学び卒業していることに驚かされる。それらの大学とは、プリンストン大学、コロンビア大学、ニューヨーク市立大学、エジンバラ大学、ウィーン大学、ベルリン大学であり、1893年に愛咲は帰国している。

1895年（明治28年）、愛咲は伝染病研究所で北里柴三郎の助手を務め、多くの論文を残している。北里はドイツ語が専門で英語があまり得意ではなく、中川愛咲がそこを上手に補佐したと言われている。愛咲は3年間の在職後1898年（明治31年）、31歳の若さで仙台第二高等学校の衛生学、法医学の講師に就任、翌年、教授に昇進した。

教員の肩書の多くが、帝国大学卒業の医学士であるのに対し、愛咲の肩書のみが米国の大学卒を示す「ドクトルメデチネ」であり、ひときわ異彩を

放っていた。愛咲の指導で1902年（明治35年）には、東洋一と称せられた細菌研究室が作られた。

愛咲の仙台の活動の中で医学を教える中で出会った清国の留学生、周樹人（魯迅）に影響を与えたことは特筆すべき事だった。「仙台における魯迅の記録を調べる会」があり、魯迅がなぜ医学の道を手を捨て、文学や国民運動の道に走ったかが調査されている。愛咲は授業の合間に自分の幻灯機で日清戦争のスライドを写し説明していた。清国の兵が縛りつけられ虐殺される場面を、日本人だけでなく清国人も喜んで観ている様子に心を痛め、本国へ帰り国民運動に走る決意を固めたのである。正に愛咲がそのきっかけを作ったのである。

1905年（明治40年）の東北帝国大学創設の年、愛咲は40歳の若さで突然辞表を提出し受理された。愛咲の退職理由は神経衰弱であったが、真の理由は、愛咲の孫の中川嘉雄氏によると奥様の光の結核の療養のためだったという。退官後は大磯で、今は大磯小学校の一部となっている広大な土地で悠々自適の生活を送った。そして1921年（大正10年）53歳の生涯を終えた。墓地は青山霊園1種第20号口18番2号で、中川嘉兵衛、中川隆子、中川一族の墓石と共に眠っている。

人の運命が、神に導かれた偉大な人物との出会いによりこれほどにも開花することを私は改めて痛感した。嘉兵衛は水をはじめとする新しい産業を日本に興し、愛咲は欧米の最先端の医学を学び、日本の医学の発展に大いに貢献した。ヘボン博士に導かれた二人の男の生涯をたどり、私は神の恵みと人の縁に想いを馳せた。今後も嘉兵衛と愛咲を中心とした、人との出会いのドラマを掘り下げていきたいと思っている。最後に、東北大学における愛咲の活動は今まで不明だったが、北里大学名誉教授の田口文章博士により解明されてきた事を改めて感謝したい。



若松賤子が出会った女性たち — 矯風会活動をとおして —

尾崎 るみ

若松賤子が文筆活動以外に心血を注いだものとして、婦人矯風会を中心とした社会活動があった。ここでは若松賤子が活動をとおしてどのような女性たちと出会ったかを見てみたい。

1. 横浜禁酒会と京浜婦人大祈祷会

早くから貿易拠点のひとつとして、またキリスト教の拠点のひとつとして発展を遂げた横浜では、他の地域に先駆けて禁酒運動が展開された。明治8年6月には奥野昌綱を議長、牧野銃太郎を副議長とする横浜禁酒会が設立されたが、奥野の述懐によると、牧野が禁酒の掟を破ったためにこの会は「ほぼ瓦解の有様」となり、間もなく休眠状態に陥った。

一方、明治16年の全国福音同盟会の際に婦人大祈祷会が開かれたのを機に、その後もせめて東京と横浜で同様の集いを継続しようという声があがり、毎年春には横浜、秋には東京で京浜婦人大祈祷会が開かれることになった。西洋婦人3名日本婦人3名からなる委員会が準備を担当し、毎回300~400名もの参加者を集めたという。伊藤秀吉は『日本娼妓運動史』（1931）で「京浜婦人大祈祷会を基とし」て東京婦人矯風会が誕生したと述べているが、教会で指導的立場にある女性やミッションスクールの女性教師らが地域を超えて連帯するネットワークがこの頃すでに形成されていたことは、注目に値する。明治15年6月にフェリス女学校を卒業し、母校の教師となっていた若松賤子がどのような形で京浜婦人大祈祷会に関わっていたかは不明だが、少なくとも教え子らと共に積極的に出席したことであろう。

2. レビット夫人の来日と東京婦人矯風会の誕生

1874年11月に米国オハイオ州クリーブランドで誕生したキリスト教婦人矯風会（Woman's Christian Temperance Union, WCTU）は年々その活動範囲を広げ、1883年には世界キリスト教婦人矯風会（World Woman's Christian Temperance Union, WWCTU）が設立された。世界中の政府に禁酒の請願書を提出するという任務を負った初代特派員としてレビット夫人（Mary Greenleaf Clement Leavitt, 1830-1912）がハワイやオーストラリアを経て来日したのは、明治19年6月のことである。この時、レビット夫人の受け入れにあたった中心人物が誰かは不明だが、アメリカ人宣教師らが何らかの形で関わったことは確かであろう。6月・7月には東京と横浜で十数回、9月・10月には関西地域で三十数回の演説会を行った後、レビット夫人は神戸から船で清国へと向かった。

明治17年12月には、西周、津田真道、加藤弘之

といった明六社関係者が中心となって大日本節酒会が設立されるなど、日本でも飲酒の害についての認識が高まりつつあったが、レビット夫人の影響力はすこぶる大きなものであったといえよう。

特に女性たちの反応は鋭く、かつ素早いものだった。東京では明治19年7月24日に明治女学校で婦人矯風会設立の準備会が開かれており、横浜では「外国婦人等」が「万国婦人禁酒会の支部」設立を望む声を上げた。しかしながら、準備活動を率いていた木村鑑子がコレラで急逝したため、矢島楯子を会頭とする東京婦人矯風会が設立されたのは、同年12月になってのことだった。また、横浜禁酒会はレビット夫人来日の刺激によって休眠状態から目覚め、同年秋頃から新たな活動を開始したと思われる。

3. 東京婦人矯風会との関わり

若松賤子と婦人矯風会活動の最初の接点は、確認出来るものとしては、明治19年7月17日に木挽町厚生館で開かれることになった、女学雑誌社主催のレビット夫人による「女学の演説会」の通訳を引き受けたことである。『女学雑誌』第29号（明治19年7月15日）には、「傍聴は女子に限り通弁は横浜フェリス女学校の島田かし姉に依頼し我姉妹諸子をして一婦人尚よく為すあるに足るの実を觀せしめ且つ諸子に切要なる数多の教を聴かしめんことを望む本誌愛読の姉妹は一人をも多く伴ひ來館あらんことを希ふ」と記されていた。

これに先立ち、横浜でもレビット夫人の演説会は何度か開かれているので、若松賤子はそのいずれかに足を運んだに違いない。毎日新聞は6月25日に「横浜居留地ヘイス学校に於て禁酒演説会」が開催されたと報じているが、「ヘイス学校」がフェリス女学校のことだとすれば、その演説会では若松賤子が通訳を務めた可能性さえ考えられる。

7月17日の演説会では、実際には新栄女学校の第1回卒業生である渡瀬かめ子（旧姓相田）が通訳をした。若松賤子が急に体調を崩したため、彼女の「敬愛し玉ふ友人」である渡瀬かめ子がピンチヒッターを務めたという。このような人脈も、京浜婦人大祈祷会の賜物といえるかもしれない。

東京では11月9日に虎ノ門教会でようやく新たな会合が持たれ、牧師の大儀見元一郎が議長を、巖本善治が書記を務めるなか、41名の参加者によって発起人や規約委員の選出が行われた。発起人は矢島楯子をはじめとする22名、規約委員は矢

島楯子、海老名みや、湯浅はつ、佐々木とよ(豊寿)、青木まさ、三浦りう、本田じゅんの7名である。これらの中にも、また12月6日の発会式で選出された役員にも若松賤子は含まれていないが、翌明治20年7月現在の会員一覧「神奈川横浜の部」には、「横浜百七十八番地フェリス女学校」の住所で「島田かし、平野はま、青山いく、富山雪、佐藤てつ、浜口なみ、星野幸、松田きみ」の8名の名前が記載されている。島田かしは若松賤子の当時の本名、平野以下は教え子たちである。

設立当初の東京婦人矯風会の役員に名前を連ねてこそいないが、若松賤子が婦人矯風会の活動に興味を持ち、積極的に関わっていたことはいくつかの事実から明らかである。ひとつは、『横浜禁酒会雑誌』第3号(明治22年1月19日)の「魔睡剤」と題され、「若松賤子述」と記された文章だが、これには「左の一編ハフェリス女学校時習会に於て演述されしを同会員の筆記せし者なり」という前文がある。「魔睡剤」とは、酒や煙草や阿片その他の中毒性の高い物質を指しており、若松賤子は米国の科学者の書物に基づいて論述している。明治21年11月に『横浜禁酒会雑誌』が創刊された際、同会は「創立2年で会員500名」と記されている。同会幹事がフェリス女学校で習字と美術を担当した林霧^{しげる}であることから考えて、若松賤子も当然会員になっていたと思われる。時習会では、このような科学的な話題も扱い、聴衆に新たな知識を提供していたことがわかる。

もうひとつは、ラマバイ女史(Pandita Ramabai, 1858-1922)との交流である。インドの社会改革家である同女史は、WCTUのウィラード会頭の紹介により、明治21年12月19日、アメリカからインドに帰国する途上で日本に立ち寄り、禁酒演説やインドの女子教育の窮状を訴える演説を行った。12月21日には横浜共立女学校とフェリス女学校で演説している。日本滞在期間は2週間ほどであったが、日本を発つ前に「病褥に在」った若松賤子をわざわざ見舞ったという『女学雑誌』第143号の記事からは、二人が短期間に強い絆を結んだことが窺われる。

また、巖本善治との結婚を目前に控えた明治22年7月1日には、横浜住吉教会で開かれた一夫一婦建白書についての集会で若松賤子は起草委員のひとりにも選出されているが、委員のほとんどは横浜禁酒会の会員であったと思われる。

4. 主要メンバーのひとりとして活躍

結婚後、若松賤子はさらに積極的に東京婦人矯風会に関わった。明治22年12月7日の同会年会では、「改選議員」のひとりに選ばれており、翌明治23年2月24日にはWWCTU第二代特派員のアッケルマン女史(Jessie Ackermann, 1857-1951)を小島清子と共に横浜で出迎え、本郷竹町会堂での演説会では通訳も務めている。小島清子の夫で当時東京府議会議員を務めていた小島官吾は、娼妓運動における巖本善治の同志であった。東京婦人矯風会には、夫婦そろって社会活動に精を出した者が少なくない。なお、佐々城豊寿は婦人白標倶楽部を組織して積極的に対外的な活動を展開したが、若松賤子も同倶楽部の一員として他団体との同盟運動や衆議院傍聴規則に対する陳情などに携わっている。

明治25年9月13日には、WWCTU第三代特派員としてウェスト女史(Mary Allen West, 1837-1892)が来日した。この頃、若松賤子は転地療養のために王子村に転居するような状況で特派員の受け入れや通訳などを行うことは出来なかった。ウェスト女史は、北海道、東北、横浜、東京、関西と全国各地で計97回もの演説会を行い、延べ4万人以上を動員するという驚異的な働きを見せたが、残念なことに12月1日に金沢で客死した。金沢、東京、横浜の各地で葬儀が行われ、12月18日には厚生館で「ウェスト嬢追悼大演説会」が開かれた。ウェスト女史の死は多くの人々に悼まれ、彼女の願いであった全国的組織の設立は、翌明治26年4月3日の日本婦人矯風会総会において実現されることとなったのである。

明治26年11月には、廃刊した『東京婦人矯風雑誌』に代わって新装の『婦人矯風雑誌』が刊行されたが、同誌奥付には、編集委員一覧の筆頭に若松賤子の本名「岩本かし子」が置かれている。誌面改訂にあたって、多くの貢献をしたのではないかと考えられる。

明治29年2月10日、若松賤子はその生涯を閉じたが、『婦人新報』第14号には「故巖本夫人かし子の君」と題する弔文が掲載された。晩年の療養生活中においても、「会頭矢島かじ子氏、屢君の病褥を訪ひて其意見を求め、君も亦病を忘れて其事の為に計り、益を成す事を就さしめたること再三ならずと云ふ」と記されており、矢島楯子の信頼に応えるべく最期まで尽力したことがわかる。婦

人矯風会の活動をとおして出会ったさまざまな女性たちによって、若松賤子の世界は大きく広がり、より豊かなものになったと考えられる。

追悼 恩師佐藤和夫先生

遠 藤 香



「まだ多くのことを伺いたかった。」「もっと教えて頂きたかった。」高校2年の日本史の授業が佐藤先生との出会いです。冬場の教室に入っていらっしゃると

「窓を開けろ。空気を入れ替えろ。」と大きな声で生徒に言います。お弁当の匂いと化粧にちょっと興味のある女子校生の教室は異様な匂いだったのでしょうか。先生はすぐに淡々と授業していらっしゃいました。礼拝説教の話はいつも「田中正三と足尾銅山鉍毒事件」でした。高校3年の担任は佐藤先生でした。志望大学の受験に失敗した私に大学の二次試験や専門学校を受験することを勧めて下さいました。先生の進路指導がなければ現在の私いなかったことでしょう。

社会人になり再び学びを始めレポートを書き先生に読んでいただくと赤ペンでびっしりと細かく添削をして下さいました。そしてこの会で勉強をすることを勧めて下さいました。

先生は教職を早めに退かれ研究者として活躍されていました。水軍史では多く論文を書かれていました。また市民講座の講師としても活躍していました。

私の叔母と父がある市民講座に参加すると偶然に講師は佐藤先生でした。それ以来先生と父は交わりを深めていきます。父子共に先生にお世話になりました。

先生が病に倒れられてからは私より父が手紙で連絡を取っておりました。先生は手が不自由になったために、書き物はお孫さんがパソコンでお手伝いをされていたようです。体が不自由になられても、研究に対する熱意は変わらずにおられました。

また先生はお酒がお好きで父に「次に一献を。」とよく言っておられました。その約束も果たせず終いです。

佐藤先生は私にとって高校の先生である以上に

尊敬する研究者です。もう、お話が出来ないのが残念でなりません。

心よりご冥福をお祈り致します。

[付記]

遠藤香さんに宛てた奥様の佐藤弘子さんからの手紙を付け加えさせていただきます。

お手紙ありがとうございます。

平成26年8月29日肺炎・心不全で亡くなりました。覚悟はしていましたが、本人もがんばり家の中は歩いていました。天気の良い日は車いすで近くの公園に行くのを楽しみにしていました。9年間よくがんばってくれました。皆さまによろしくお願ひ致します。(佐藤弘子さん記)

石川潔さんの働き—ヘボン先生を伝える

島 田 貫 司



石川潔さん(1934.4.11生まれ—2014.9.16帰天)80才のご生涯。75才頃肝臓癌になられ切除もできない、治療薬もない、せめても病の進行をおくらせる、すべてを神にゆだねて一日一日を大切に生きられた。一見恰好の良い老人で、病人とは思えない姿で横浜駅近くで私と時々逢っていた。

石川さんの半生はまさにヘボン博士の顕彰、日本滞在33年間の働きを後世に残したい伝えたい生活だった。又香辛料の評論をし、道楽として四季を感じさせる香料を加え、独自調査の「八いろとんがらし」を大ファンの銀座鳩居堂製の便せんに俳句を筆書きし、同社特製の封筒に入れて配布されていた。病身となられた石川さんは、あと何日神様から生かしてもらえるか、ご家族と友人方の支えにいつも感謝、感謝と逢うたびに口ぐせに語っておられた。

何年かけて調べられてこられたのか、『ドクトル・ヘボン関連年表・ヘボンの誕生からヘボンの葬儀・追悼会の日まで』(A4版165頁・1999年10月17日)、本屋にない本を作り、1冊1000円でバッグに詰めて販売していた。完成した本は数年間家の中に置き本屋の倉庫と化したそうだ。

2000年2月号の国会図書館月報「本屋のない本」にこの書が紹介され大変喜んでおられた。書評の

永村泰代さんは、一外国人の死を悼む記述を読むと、ヘボンが果たした役割が感じられる興味深い本といわれた。年表といっても年月日と簡単な事項が書いてある年表ではない。ヘボンの活躍はもちろん、当時の日本の歴史的事件、横浜で起きた事柄等を絡め詳細に記述され、またヘボンに關係する人物の略歴等を随所にちりばめ読み物としても楽しめ、ヘボン研究に有用な資料集となっている。

石川さんは病とつき合いながら、来日150年を記念して前述の『関連年表』に手を加えた新本の執筆に日夜励まれた。2009年出版に向かったの執筆、調査、病気を忘れて講演するなど、頼まれると何処でも行かれたそうだ。新たな実像にせまる感動の大作「ドクトル・ヘボンのこと―読み物年表」仮題1815.3.13—1911.10.27.ヘボンの誕生からヘボンの葬儀、追悼会の日まで」。ドクトル・ヘボンの働きとその時代の状況を読み物風に解説した年表の執筆に熱中、原稿を送りA5版上製カバー装丁本568ページ定価未定、版下まで出来上がったが、病を心配されたご家族の強い希望をうけ未完成となる。出版社に多額な費用を支払い中止された。実に残念。

2013年9月8日、ご長女泉さんが横浜指路教会の創立記念日に受洗されてとても喜んでおられた。そして9月21日ヘボン先生の命日、教会の集會室で横浜プロテスタント史研究会の月例会に石川さんは病院を抜け出して発表した。それを知った多くの友人が出席、いつもの倍以上の出席者に向かってヘボンの写真、昔の写真など拡大パネルを背にして語られた。生前葬儀、この世での最後のあいさつを交わされた感があった。石川夫人は毎日病室を見舞われ、衰弱していく夫との地上での別れを語り合い、いつも私たちの中に神さまがいて下さると云っておられた。私の健康を思い今のうちにと横浜プロテスタント史研究会に招いて下さった岡部さん、会員の方々、藤掛牧師、教会の方々感謝されていた。

石川さんはヘボン先生の働きに常に感謝、顕彰の証しとして、ヘボン先生第二の住居跡に1949年10月18日に建立された記念碑の掃除とミニ集會を提案された。2000年から阿部志郎氏を会長に参加者8人～15人、ヘボンが来日した10月の第三土曜日の午後清掃を行ってきた。

「未完成 石川潔著 読みもの年表
ドクトル・ヘボンとその時代」

- 1、ヘボンの誕生から横浜上陸まで
- 2、神奈川宿内の成仏時を仮寓としての生活
- 3、横浜居留地で(英語塾開講、和英語林集成編纂)
- 4、聖書の和訳事業を開始
- 5、BLUFF (山手) に転居 (塾はジョン・バラに託す)
- 6、療養のためヨーロッパへ
- 7、聖書翻訳完成し明治学院開校と指路教会献堂
- 8、米国でのINKYO生活のため帰国

ヘボンの日々の出来事を日付によって丁寧に詳述。まるでヘボンの息づかい、声が伝わり彼の歩いている足音が聞こえてくるようだ。当時の横浜の町の様子がはっきりと映し出されている。本書によってわたしたちはヘボンと同時代を「生きる」というすてきな体験をすることになる。

この年表の早期出版を願いたい。再び石川さんを多くの方々の心の中に生かしたい。

【研究発表リスト (その38)】

- 第356回 2014.4.19 伊藤 泰子
「凜とした教育者・伝道者 小宮珠子」
- 第357回 2014.5.17 海老坪 眞
「坂田祐院長と関東学院50年
―坂田院長からプレゼント5回―」
- 第358回 2014.6.21 吉馴 明子
「戦争末期の在日朝鮮人教会と田中剛二」
- 第359回 2014.7.5 徐 正敏
「3・1独立運動とキリスト教」
- 第360回 2014.9.13 小玉 敏子
「A.H.キダーとC.A.カンヴァース
―伝道と女子教育に捧げた生涯―」
- 第361回、2014.10.18 竹内 智子
「讚美歌のルーツからスピリチュアルへ
―英米の讚美歌における口承伝承の流れ―」

【編集後記】

今回の号から発表要旨の原稿を400字詰5枚から10枚までと変更しました。それによって、発表者の表したいことが少しでも広がればと思って変えました。

佐藤和夫氏は、1981年10月発足当時からの会員でした。研究会に関わって下さいました。石川潔さんはヘボン関係の発表をよくして下さいました。お二人に感謝するとともに、ご家族の上に主の慰めがありますようにお祈りします。(岡部一興記)